

## 第二十回がん哲学塾

### ニュースレター

発行日：令和元年9月5日

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

E-mail:juku\_0307@yahoo.co.jp

7月27日(土) がん哲学外来の創設者である樋野先生をお招きしてメディカルカフェを開催しました。今回はアクティブラボの生徒も参加しました。

#### メディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ  
3回生 徳田 華歩

今回初めてメディカルカフェに参加させていただきました。今日まで上手くお話ができるだろうか、話の展開に応じて上手くできるだろうか、話の輪に入れるだろうか、など不安がたくさんあったのですが、樋野先生の“過ぎたことや将来の不安ばかり、思いわずらうのはやめましょう。今日が人生最後の日と思って「今」に専念しましょう”という言葉思い出しました。「今」を大切に「今」自分に何ができるのかを考える。これはメディカルカフェ前にもお話していたのですが常に「今」を考え、ここにしかない物、ここに立つ理由、限られた時間の中で皆と刻む「今」を真っ直ぐに向き合うことが大事なのだと改めて感じました。

皆さんとお話する中で他の班にも話題が上がったという患者さん中心の医療について、医師が主導となったパターンリズムに基づく医療とは違い、患者さん中心の医療では患者さん自身が身体に何が行われるか決定する権利があり、医師はまず患者さんに適切で十分な医療情報を提示し、そのうえで患者さんから同意を得なければいけません。他の班では医師が決めず選択肢を与えることで自分たちの未来に責任を負わないと逃げているように感じ、自己決定するのが負担になっているという話を聞いて驚きました。私の班では多くの選択肢の中で自己決定をすることに最初は戸惑いがあったが医師に決めてもらうよりも自分自身で未来を決めることでこの先悔いは残らないという意見でした。自分の班だけでなく他の班と意見交換することでそういう考え方もあるのか、と気持ちの捉え方の違いに驚いたと共にまたひとつ考える大きな課題として視野が少し広がったように思います。

又、個人的に「がんを患ってよかったと言ったら変な言い方だけれど後悔というか嫌な気はしない。」とお話されていたことがとても印象的でした。がんを患うことに対してけしてマイナスに考えるのではなく自分でプラスに変える。経験することで今まで知り得なかった知識や今まで考えなかったことを深く試行錯誤し、自分自身を見つめ直す機会を与えてくれたという想いを知り、前を向いて毎日を過ごしているということがお話されているときの皆さんの笑顔で感じ取ることができました。

あらゆる立場に立っている人たちが経験を通じて想いを共有し、温かい空気感の中でお互いが分かち合う、そんな素敵な場を設け、そして自分がその場に携われたことを誇りに思いました。

### なにもない1日が宝物

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ  
1回生 西尾 萌

がん哲学塾での樋野先生のお話は、ひとつひとつの言葉に温かみを感じました。私は沢山のメモを取りましたが、特に心に残ったのは「これから先の長い年月のことは考えず、今日という日以外には日がないと思ってただ毎日を過ごす」という言葉です。この言葉を心に留めて日々過ごすと、淡々と過ぎていく毎日が、かけがえのない時間になるだろうと感動しました。がんを患って、毎日が思いやられると悩まれている方へのメッセージですが、これは誰にでも大切であり、忘れてしまいがちな事だと思います。実際にお話しの後のカフェで、「先生の言う通り、今は毎日時間をたっぷり使って‘暇している’とおっしゃった方がおられました。心にも、時間にも余裕を持つことが良いのだと、改めて感じました。

カフェに参加された方々のお話を伺うと、ご自分の状況を全て打ち明けたいという方もおれば、あまり詳しく話すのには抵抗があるという方もおられました。初めてのアクティブラボの参加で戸惑うこともあり、全ての参加された方にご満足頂けたカフェになったかは不安です。ですが、私は困っている人と一緒に困って、嬉しい時は一緒に無邪気に笑える人になりたいです。患者様と温かい人間としての関係を、これから多くの患者様と築きたいと思いました。

### メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター  
4回生 恵美 良太

今回のメディカルカフェは僕自身、2回目の参加で、まず前回に比べて参加者数が大幅に増えていてとても驚きました。その為、メディカルカフェの班での人数も多くて色々な世代の方のお話を聞くことができました。今回印象に残ったのは、「治療法を医者が何個も提案してくるけど結局は自分たちで決めるように言われ、どうしたらいいかわからない」という意見を聞いたことでした。現在、インフォームド・コンセントが主流になっており、最終決定権は患者自身ということになっています。ですから、医者自体は正しいことを行なっているのですが、かえってそれが患者さんやその家族を苦しめているという現状は初めて気付かされたことでした。ただ、医療人が患者の命を救うために一生懸命やった行為であっても、それが後々不本意だったと訴えられ責任を背負う立場にあることを考えれば、同じひとりの人間として社会を通して守っていくためには、このような制度は必要ではあるかなと思いました。

## メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4 回生 渡邊 理乃

午前中のがん哲学塾では、樋野興雄先生の著書『いい覚悟で生きる』の中の「今日は「今日の苦勞」で十分、というテーマについてみんなで話し合いました。このテーマは、病気を患っていない人や私たち学生においても共感することが多い内容でした。テストや勉強、研究室、インターンシップ、アルバイト。しなければならないことを思い浮かべると、いっぱいいっぱいになり、先のことを考えるととても不安になります。本には、今日が人生最後の日と思って今に専念しましょうとありますが、私は今日という日は今日しかないので、今できることをしっかりこなさなくてはと自分を鼓舞して毎日を過ごそうと思いました。また、忘れられないことを無理に忘れる必要はなく、自分の中で優先順位を下げればよいという考え方もとても参考になりました。嫌だったことや後悔していることを記憶から消し去ることは難しいですが、今自分がやるべきことは他にもきつとあるので、考えることの順番を入れ替えるだけで気持ちは楽になると思いました。他にも、学生の私でもできる目の前のやるべきことを考えてみました。そうすると、先日埼玉県の川越で市民学会が開かれたのですが、その際に学生スタッフとしてお手伝いをさせていただきました。このときボランティアをしに行こうとは思っておらず、自然に何かできることはないか、参加される方が快適に過ごされるにはどうしたらいいか、と周りを見渡して走り回っていました。2日間のお手伝いを終えた後は、正直とても疲れていましたが、とても満たされた感じで充実感がありました。この2日間の経験を、将来薬剤師として患者さんと関わる時に活かし、患者さんのなかで辛いことの優先順位を下げられるような医療人になりたいと心から思いました。

午後の樋野興雄先生の講演では、言葉の処方箋をたくさん聞くことができました。一番心に残っているお話は、「マイナス×マイナスはプラス」です。自分よりも弱い人を探して一緒に寄り添うと、ふたりともプラスな気持ちになるというお話ですが、「プラス×マイナスはマイナス」になるので、プラスの人はマイナスの人を避けがちだそうです。私はマイナスになるから避けるのではなく、犬のおまわりさんのように一緒にマイナスになって困れる人、そばに寄り添える存在になろうと思いました。

メディカルカフェに来てくださる患者さんは、明るい方も多いのですが、まだ前を向くことができないとおっしゃっている方もいらっしゃいます。健常者にはわかりえない気持ちだと思うのですが、実際に患っておられる方の言葉はとても重みと説得力があり、カフェが始まる当初は気持ちがモヤモヤしていますと自己紹介された方が、帰られる際には一緒に笑って過ごしていました。私たち学生ができることは本当に限られていますが、がんサバイバーの方の力もお借りして、メディカルカフェという場が少しでも多くの方の心の拠り所になってほしいと思った1日でした。そう思ってもらえる空間を作れるように、今の自分にできる精一杯のことを全力で取り組みたいです。

### メディカルカフェに参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

1回生 橋本 莉那

今日のメディカルカフェで、ガン患者さん達が「医療者と患者さんとの視点の違い、壁の様な物がある」と言う話をしてくれました。病状等を患者さんに伝える時とかに、医師がカルテとかばかり書いていたり、目線を合わせてくれない等してしまうと、患者さんが医師や病院に不信感を持ってしまったり不安になってしまうと言っていました。他にも、「専門外だから」とか「この病院では対応できない」等と言われてしまうと、「医師から突き放されているのでは」等と今まであまりに大きな病気をしていなかった人ほど思うようです。私自身は、チーム医療は医療者が患者さんに寄り添って、患者さんも含めて行われる物だと、他の場で聞いた話し等で思っていたのですが、実際では患者さんからは全員と言うわけでは無いでしょうが、樋野先生の言葉を借りると「犬のお巡りさんのように一緒に困って考えてくれる」と言う医療者少ないのではと感じました。そして、上のような話を聞くと、患者さんとのコミュニケーションが本当に大切なんだなと思いました。薬剤師に対してもあまり話す機会がないや薬の副作用の説明が聞いたりした物以外をあまり積極的に伝えてくれない、新人薬剤師が伝え忘れをパニック状態で伝えて来たりすると、患者さん自身も不安だし診断を受けパニックになっているのを更に不安にしている等と言っていました。最後に隣に座っていた方が「患者のことを親身になって考えれる薬剤師になって欲しい」と声をかけてくれました。本当にその通りだなと、薬剤師に対する不満等を聞いて思いました。今回始めて参加しましたが、患者さんからの視点で見る医療者や医療機関のことや考え方に触れることができ、とても楽しく本当に良い経験になりました。

### 話すことのすばらしさ

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

1回生 濱部 あみ

がん哲学塾で私は、亡き祖母についてお話をさせていただきました。祖母は2年前にがんで亡くなったのですが、私は闘病生活の間毎日お見舞いに行きたくさんの時間を祖母と過ごしていました。しかし、私は祖母に何が出来たのだろうか、もっと祖母を元気にできることがあったのではないかとずっと思っていました。しかし、今回色々なことを話したり聞く中で「to doではなく、to beで十分だ。」という言葉が心に響きました。自分が祖母の元に毎日お見舞いに行っていたことで十分だったんだ、to doではなくto beで良かったんだと今になって感じることができました。2年経った今でも、祖母との闘病生活を思い出すと涙が出てしまったり悲しい気持ちになります。

次ページへつづく

しかし、今回同じような境遇の方に話せたことや、ステキな言葉をかけてもらったことでこれから、少しずつですが昔のことを思い出しても後悔することなく、前に進める気がしました。このことはメディカルカフェにもつながることだと思いました。自分の話を「そうですね。私も同じことを経験して辛かったです。」という一言をかけてもらうだけで、少し心が晴れるのではないかと思いました。来られていた方が「自分ら患者はわがままで、病気のことを話して同情されるのも辛い、でも流されるのも悲しいんです。」とおっしゃっていました。その言葉に多くの方が頷き同じ意見をおっしゃっていました。自分は大きな病気を患ったこともないので、病気を患った方はそのような気持ちでいたことを初めて知りました。病気で大変な思いをしているからこそ他の人より優しく接した方がいいものだはずと思っていた。しかし、病気を患った本人は特別扱いをしてほしい訳でもなく、ただしんどい気持ちを聞いて欲しくて、無理に慰めたりして欲しくないんだなと思いました。このことは、今回のメディカルカフェに参加させてもらわなければ、この先も知ることのできない気持ちだったと思います。また、樋野先生の本を読ませていただき病気を患っている方に「病気のことを忘れて、旅行に行ってはどうですか？」などの声かけをすることも、他人事のように聞こえて、しんどい気持ちになることも知りました。それは病気を患っている方と話すときだけではなく、普段友人から相談をされた時にも「そんなことをどうして気にしているの？」とか、「そんなこと、もう忘れてしまったら？」という返事もしてはいけないことなんだと気がつかされました。「そんなこと」や、「忘れたら？」という言葉はとても冷たく感じるものだとして改めて認識することができました。自分にとってはとても重大なことであって、忘れることができないから悩んだり、相談しているので丁寧に返事をする必要があると思いました。そして、「優先順位を下げるのが大切だ」ということが1番の解決法だということにも共感でき、悩んでいる人にとっても求めている返事になっていると思いました。意図的ではなくても、しないといけないことが日々あると悩む時間さえなくなり、悩んでいたことが気にならなくなることもあると思うからです。私自身、忙しくしている間に悩んでいることを忘れてしまったりしたことがあるので、しんどいことがあれば意識的に優先順位を下げて、その日を楽しく生きることができるようになりたいと思いました。また、メディカルカフェの帰りにはとてもステキな笑顔で「ありがとうございました。」と声をかけてもらいました。私はメディカルカフェに参加させてもらうのが今回が初めてだったこともあり、テキパキと動けた訳ではありませんが、病気のお話を聞いてその方のお気持ちが少しでも楽になったのであればよかったな、と凄く思える一言でした。また、「自分がこのメディカルカフェに参加することで、元気になったので自分もこの活動を広げる側に立ちたい」とおっしゃっていた方もいました。メディカルカフェが更に世の中に広まり、1人で悩んでいる方や、辛い思いをしている方が心休まる場所が増えれば良いと思いました。



## 初めてのメディカルカフェ

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センターアクティブラボ

3回生 北 夏美

私は普段どっちかという人の話を聞くことよりも、人に話を聞いてもらうことの方が多いと思っています。たまにその癖が出てしまい、人の話をど不安ばかりでした。けど実際はそんなこともなく、自分が気を付けていた、もう少し相手の話を聞くということをしているうちに自分が思っていた以上に相手の話を聞くことができ、いつもの自分だったらこんなにしっかりとした思いを相手に伝えていないだろうなということまで実感できました。

今回のカフェで特に印象に残ったのは自分の母と同じ年の方の話でした。その方は、家族や周りに乳がんなどのがんになったことがある方が幸いにもいなかったのが自分がいざなった時にどのようにしたら良いか、まず誰に相談するべきか、私は生きれるの？死んでしまうの？とか、娘の花嫁姿が見れないかもしれない、などといったたくさんの不安を抱えてしまい、がんになってしまったことでこれから先のこと全てが負の連鎖なんだなと覚悟をしたそうです。けど実際、覚悟をしたからといって自分の気持ちは付いていかず、毎日不安で不安でしかなかったと言っていました。けど娘にがんのことを報告したのは、手術が決まってからだということを知り私は驚きました。私にその時にだいぶ驚いていたのか、その方が第三者に話すほうが楽でいいのよと言ってくれました。そうすると周りの方も同意していて少し驚きました。けど話を聞くうち途切れさせてしまうこともよくありました。だから今回のメディカルカフェでは、自分が話したいことがあっても少し我慢して、もう少し相手の話を聞いてみようという事を心がけていました。

メディカルカフェを経験するまでは実際どのようなものかも分からず、自分がその場にいる想像もしにくかったです。そして、がん患者さんに何て話しかけたらいいのかな、質問されてもちゃんと返せるのかな、相手が嫌がることを言ってしまうのかな、なに、家族は自分たちを一番に頼ってほしいという気持ちからだんだん病気が進行するにつれて、心配して欲しくないからあまり話したくない。負担をこれ以上かけたくないから話すのを躊躇してしまう。と言っていて、納得しました。自分がその立場になった時を考えると、たぶんそうなるのかなとも思いました。けれど実際当事者にならないとわからない部分しかないと思うのであまり簡単にも言えず、何と言っているかわからなくなりました。ほとんど関係のない私には聞くことが1番大切だと思いました。

初めてのメディカルカフェでは、相手の話を聞くことの大切さを改めて感じれて良かったなと思っています。次のカフェの時には今回のことを生かして、相手の話をもっと聞き、自分の意見もちゃんと伝えるようにしたいと思います。

## メディカルカフェに初めて参加して感じたこと

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター アクティブラボ

3 回生 新田 菜月

私は今回初めてメディカルカフェに参加しました。どんなことをするか分からない状態での参加で、他のメディカルカフェに参加する学生の知り合いもあまりいないので少し緊張していました。

午前中はメディカルカフェの準備時間でしたが、何をしていたか分からず戸惑っていると先輩が「手の空いている子はこれをやって」と指示をくださったので助かりました。また、ナフキンの折り方、お菓子やウェルカムカードの置き方など「見栄えが良いように」と言われてこんなことにも来る人のことを考えて気を配りながら準備しないといけないんだなあと思いました。おしゃれな置き方を研究しながら準備することがだんだん楽しくなりました。事前にウェルカムカードを書いて持って行ったのですが、先輩方のウェルカムカードの飾り付けがとても可愛くて次回からは私も頑張って豪華にしてみようと思いました。

準備が終わり樋野先生の本を使って講義が開かれたのですが、涙を流しながら自分の家族のことを語る人もいました。普段友達との会話で涙を流しながら自分や家族のことを話すことはないのもとても新鮮な時間でした。

メディカルカフェにお越しくくださった方々をセミナールーム前で出迎え、「こんにちは。お越しくださいありがとうございます。」と言うと皆さんとても笑顔でこんにちはと挨拶を返して下さってとても嬉しい気持ちになりました。

メディカルカフェを開催する前にお茶をお出しするときコーヒーが良いと言われ、コーヒーがあることを知らず戸惑ってしまったので次回のメディカルカフェでは自信をもって対応しようと思いました。

学生が中心となって話してくださいというアナウンスがありましたが初めてなので何を話しているか分からずにいると、4 回生の先輩が同じテーブルにいたので先輩が中心となって進めて下さりとても助かりました。

私の祖母は現在がんにかかっており治療中なのですがまったく同じがんを持つ方が同じテーブルにいらっしゃいました。その方に祖母が同じがんですと伝えると、今どんな治療をしているのか、いつ頃かかったのかなどとても興味を持ってくださりました。がんにかかったことのない私にも、どういった経緯でこのカフェに参加しているのかなど質問して下さり楽しく会話することができました。

メディカルカフェが終了してからも、祖母と同じがんを持つ方からもっと詳しく話を聞きたいと言われ私自身が祖母に対してどういう想いを抱いているのか、これからどうすべきかなどを聞かれました。私はこんなに興味を持ってもらえると思っておらず戸惑いもしましたが、私が答えることで力になるならと思い、できる限り真剣にお答えしました。今回初めての参加でしたが、がんになったことで不安になっておられる方々がこんなにいらっしゃるとは思いもしませんでした。講義とは違い、より実践に近い形のものであったので参加させてもらえて良い経験になりました。

次回は先輩方がおっしゃっていた「自分にできることを常に探しながら動く」ということを念頭において参加したいと思います。

## メディカルカフェに初参加して

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センターアクティブラボ

2回生 竹ノ内 涼

7月27日、アクティブラボの一環で、初めてメディカルカフェに参加させて頂きました。大学生として普通に生活していると、普段はがん患者の方とお話しをするという機会はなかなかないので、どのように接すればいいのか、何を話したらいいのか不安を感じていました。

メディカルカフェが始まる前の、ゼミの先輩方と先生方と輪になって自分の身の上話をする際に、周りの人と自分の意識の違いに圧倒されて、今日一日自分は乗り切れるのだろうかと更に不安に思いました。しかしそれと同時に、このメディカルカフェというのはとても学ぶことの多い場なのだということも実感しました。

実際にメディカルカフェが始まると、私の抱えていた不安は少し消えました。分かってはいたことですが、がん患者もただの一人の人間であり、皆さんそれぞれの生活を送っていらっしゃると思います。各々が話したいこと、知りたいこと、思うことがあって今日この場に来てお話をしにきたのだと気付きました。それと同時に、自分がどう存在すべきなのかも何となく分かりました。もちろん薬剤師を志す者として、話を聞く態度などには細心の注意を払うべきだとは思いますが、がんに関しての知識は患者の皆さんの方が詳しいです。薬学部の生徒だからといって専門的な話をする必要は全くなく、ただの一人の人間として皆さんと話をすれば良いのだと気付きました。これはもともと分かってはいたことですが、実際その場について初めて身をもって感じられた気がします。

幸いなことに皆さんが次々と色々なお話をしてくださるので、私は聞き役に徹していました。その中で、とても積極的にお話をしてくださる方たちの中で話が回りがちになっていることに気づきました。最初に自己紹介をした時に、皆さんそれぞれの事情があって、話したいことがあって来ているということを実感していたので、今日このカフェに来て話を出来て良かった、と全ての方に思ってもらえるように、それぞれの話したいことを話して頂きたいなと思いました。そのように場を上手く回すのが私のすべきことなのではないかとも思いました。ですが、積極的に喋ってくださる方の話を遮るのも違うなと思い、大人数で話すのはとても難しいことだと気付きました。結局私がしたのは、どんなに小さな声でも話をし始めた方がいたらその方のほうを向いて相づちを打って真剣に話を聞くということでした。そうすることによってその周りの方もその方のお話に関心するようになり、少しでも喋りやすくなったかなと思います。ですが、自分が上手く場を回すというようなことは今回あまり十分に出来なかったと思うので、次回の参加の時は今回よりも上手く出来るように心がけたいです。

また今回の参加で、自分のがんや現在の医療のシステムに関しての知識がとても少ないと実感しました。前述した通り、がんに関しての知識はもちろん患者さんに劣ってしまうとは思いますが、カフェの参加者の方たちの話や気持ちをより深い部分で理解するには、もう少し知識も必要なのではないかと思いました。医療者を志す者として、もう少し医療のことに関心を持って生活していこうと思います。



「がん哲学塾，樋野教授の講演会，がんカフェを通して」

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センターアクティブラボ

3回生 神田 弥音

「今日は今日の苦勞で十分」

このタイトルとその後が続く樋野先生のお言葉を幾度か読み返しました。その中に出てきた”がんをあなたの中の優先順位から下げる”というフレーズ、心にすっと溶け込みました。明日の不安を心配しても仕方がない、今自分の楽しいと思うこと、夢中になれることに専念する。これは病気にかかわらず全ての人に当てはまると思います。周りで落ち込んでいる人がいたとき相手が好きだったこと、特技、優先すべきことを導いてあげるとこが本当の心の支えになりうると感じました。

またその後、がん哲学塾生一人一人が自身の体験談を涙ながらに語り合いました。

私は父が脳出血を患い三年ほど前入院していたことを話し進めました。いつも元気な父が自分の病気をインターネットを使って調べていると悪い情報ばかり目についてしまい、精神的に追いやられているのを感じました。私はなんと声をかけたらいいのか分からずただ今日あった出来事を話し、いつも通りであることを心がけました。母も最初は不安な気持ちでいっぱいでしたがなんとか元気付けようと父の好きなガーデニングやヨットが有名なイギリスへの旅行を提案し、父もそれを励みに少しずつ元気を取り戻していきました。きっとこれは母が父の中での病気の優先順位を下げていたのだと思います。

私も相手の好きなこと、夢中になることを思い出せるきっかけを与えられるような医療人になりたいと改めて感じました。

午後にはがんカフェに参加させてもらいました。がん患者さんとどのような話をすればいいのか、自分の中で答えを模索しながら迎えましたが実際にごんカフェが始まると患者さん自身が積極的に自分の病気について語ってくださりました。副作用で辛かったこと、医療現場での問題点を次々にあげてくださり学校では知ることのできない貴重なお話をきかせていただきました。

その中で特に印象に残ったのは”患者中心の医療”から派生した患者さんの精神的な負担です。医療の進歩で治療の選択肢がどんどん増えており、セカンドオピニオンなどで様々な医師の意見を聞かれる方も多くいらっしゃいます。ですが最後に決断を下さずのは患者さん自身です。命に関わる事を自分で決めるとなると患者さんにとっては重荷に感じる方もいます。安心して相談できる人がおらず苦しかったとおっしゃる方は何人かいらっしゃいました。そのため、このがんカフェは患者さん同士の意見交換の場としてとても大きな役割を果たしているなど実感しました。

また患者さんの中には病気の事を友達に言えず、一人で抱え込んでしまっている方もいらっしゃいます。そんなとき一番病気の事をわかってくれるのは同じ病気を経験した患者さんだと思います。そういった病気を分かり合える仲間に出会える場としても必要とされているんだと感じました。

樋野教授の講義ではスライド一枚一枚に心にぐさっとささるお言葉があり感激しました。今ではその言葉を手帳に書いて常に自分への言葉として持ち歩くようにしています。

次ページへつづく

“良き友、良き先生、良き読書をする”この言葉をきいたとき、こんなに環境に恵まれていながらも行動に移せていなかった自分を情けなく思いました。素晴らしい考えを持つ先生、たくさんの本もあるのに、ただ日々の勉強をこなすだけで満足している自分がありました。将来の医療人として精神的な成長をとげられていなかったと痛感しました。これからは毎日時間をみつけ読書をし、偉大な先生方の考え方を学び人間として信頼される医療人を目指していきたいと思います。

#### メディカルカフェを終えて

神戸薬科大学 薬学臨床教育・研究センター

4回生 園部 愛梨

私は今回参加したグループには乳癌患者さんが多くいらっしゃいました。ちょうど学校で乳癌の授業を受けていたこともあってお話が飛び交うほとんどが習ったことばかりでした。しかし知識では知っていることが多かったけれど患者さんがどこで苦労されているのか、不安に思っているのか、そういったことは実際にお話を聞かないと分からないことばかりでした。特に印象に残っているのが、ある患者さんが「医者はいろんな治療選択肢を与えるが、それこそが負担だ」とおっしゃったことです。この言葉を聞いて自分の授業で習っている内容が覆された気がしました。今の医療はパターンリズムを変えるため患者さんにも自由な選択ができるようになったけれども、患者さんの中には、専門的な事を自分で選ぶには命が懸かっているが故に重すぎると思う方もいらっしゃることを知りました。ここから、患者さんに合わせた医療というのは治療選択の提供の仕方から変えていく必要があるのだと思いました。

がん哲学塾では創設者の樋野先生にお越し頂いてお話を聞くことができました。先生のお話の中で「ほっとけ、気にするな、人から何を言われようと関係ない」というお言葉がありました。私は最近あることで友達の固執した考えにショックを受けていました。反論したかったけれど友達だからなと思いたただただ頷くことしかできませんでした。この言葉はまさに今の私が求めていた答えだったのかもしれませんが。人の考えは自由であるけれども私がそれを1回1回鵜呑みにする必要はなく気にせずほかっておくことも大切だなと思いました。お話しの中でもう一つ印象に残っていることがあって、「教育は全てのを忘れた時に思い出すもの」、そして先生にとってそれは「良き友、良き先生、良き本に出会うことだ」とおっしゃっていました。私は本を読む習慣が全くなかったのですが今回を機にちょっとずつでも読んでいこうと思いました。

顧問：樋野興夫

教頭：沼田千賀子

副塾長：横山郁子

塾生：久野聡子、増田悠香、園部愛梨、恵美良太、渡邊理乃、  
新田菜月、神田弥音、北夏実、徳田華歩、竹ノ内涼、  
濱部あみ、橋本莉那、西尾萌

